

---

# 金夢のエイド

界軌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金夢のエイド

### 【Nコード】

N6881Z

### 【作者名】

界軌

### 【あらすじ】

クリスマスも間近なある日、偶々立ち寄った街で王宮に忍び込んだエイドフェルトは、金色の髪の美しい少女シルエスタと出会う。後に「金色の女王」と謳われる王女シルエスタと、悪魔の公爵であるエイドフェルトが惹かれ合い、互いの手を取り合うまでの物語。

『聖夜のバルド』という作品の時代違いの作品となります。

## プロローグ

これは、金色の女王の秘められた物語。

歴史の語らぬ真実がここにある。

輝く太陽のような髪をなびかせた王女が王位を継ぐ時、彼女は大切な人を失った。

近くて遠く、遠くて近い、不思議な存在だった。

その人を失う事は彼女の決断であり、その一方で、彼女には逆らえぬ運命でもあった。

けれども、彼女は堪え難い喪失と引き換えるように、心から愛する人を得る事になる。

哀しくも愛おしい想いを抱く女性の、黄金の夢のような、そんな物語。

## 宵月の都

赤茶色の煉瓦で造られた家々が立ち並び、灰色の石畳が敷き詰められた街だった。

普段の穏やかさをかなぐり捨てて賑やかなその街の中を、一つに括った長い銀髪を揺らして歩く青年の姿があった。

どこか泰然とした物腰ながらも、その青灰色の瞳は物珍しそうに傍の店や路肩の屋台を見ている。

そのうち人でごった返す広場に辿り着くと、彼は近くにいた中年の男に声を掛けた。

「やあ、なんだか賑やかだね。なんの騒ぎだい？」

声を掛けられた男は値踏みするような視線を青年の頭から爪先まで走らせる。しかしその身なりが良いことに気が付くと、いかつい顔に人好きのする笑みを浮かべた。

「この騒ぎの理由を知らないなんて、余所の国から来たお貴族さんかい？」

上品なコートの中に上等なスーツを着て、丁寧に磨かれた革靴を履いていると、大体貴族に見られるものだ。

青年は軽く首肯して、にっこり笑う。

「ああ、隣国の男爵家の次男坊さ。エイドフェルトというんだ」

あまり高い爵位を言つと相手が萎縮してしまう。嘘も方便、と彼は言い慣れた台詞を口にした。

よろしくね、と彼が手を差し出すと、中年男はぶつと笑いながらその手を握った。

「俺はグルだ。あんた、かなり変わった……、おとつと、気さくなお貴族さんだな」

「変わっている、でもいいよ。よく言われるんだ」

そう言つてエイドフェルトも笑つと、グルは一層楽しそうにした。

そして握つた手を離すと、彼はそのまま広場に向かって太い腕を広げた。

「この大騒ぎは、今、この街に王太子様が来ているからさ」

「王太子様……。へえ。次の国王陛下か」

腕の動きにつられて見た広場では、売り子が声を張り、大道芸人の周囲には人の輪が出来上がっている。屋台から出る焼き物の煙や人いきれで、視界は少し濁っていた。

「変わっているね、聖夜も間近なこの時期に来るなんて」

普通はお城で過ごすものだろう？ と不思議そうに首を傾げるエイドフェルトに、グルは笑い声を上げた。

「逆だよ、逆」

「逆？」

ますます不思議に思っ て目を見張る彼に、頬の皺を深めてグルはこう説明した。

「この国ではイエス様が降誕されたのにあやかっ て、聖夜に王太子様の即位式をするんだ。それで、その時に首都を決めるんだよ。だから街を上げて殿下を歓迎するし、『こんな良い街だ』っ て皆揃っ てお薦めするのさ」

「首都を決めるっ て。……ああ、聞いたことがある。王太子殿下が即位の際に四つの都から首都を決めるっ ていう話だね」

「そうそう」

頷くグルに、エイドフェルトは指を折りながら街の名前を上げていく。

「『朝焼けの都』、『昼時雨の都』、『夕凧の都』、『宵月の都』、  
だっ たね」

「そうそう。朝から回っ ていっ て、ここ、宵月の都で即位式を行っ んだ。どこの都にも王宮があるけど、即位式専用の大聖堂があるのはここだけだからね」

彼はそう言っ と、かなり誇らしげに胸を張っ た。

それでようやくエイドフェルトにも納得が行っ た。

たまたま賑やかさに惹かれてこの街に足を伸ばしたのだが、この賑やかさには王家への素直な尊敬の念と、他の都への対抗意識が混ざり合っているのだ。

なるほど、盛り上がる訳だ。

「ふうん。……教えてくれて有り難う。どうせだから、少し王宮の周りを見せてもらいに行こうかな。向こうで良かった？」

彼が北の方に指を向けると、グルは「ああ、そうだよ」と頷いた。

「帰りには是非うちの飯屋に寄って来な。王宮は広いから城壁を一週し終わる頃には、腹が減り過ぎてへっこんじまうよ」

にやりと笑って、親指で背後の店を指し示す。

すかさず商売っ気を出す男に、エイドフェルトは苦笑を返す。

「分かったよ。たっぷり食べさせてもらうから、覚悟していてくれ」

冗談っぽく言ってグルと別れ、彼は北の方角へと足を向けた。

\*

「ふうん。本当に広いな」

先程の広場の何倍、いや、考えるのも嫌になるくらい王宮の城壁

は延々と続いていった。

エイドフェルトは真っ直ぐ北に向かって、正門に辿り着いた。そこから時計回りに歩を進めたのだが、行けども行けども視界の右側はひたすら城壁なのだ。

ようやく角に来たと思って曲がると、馬車の土煙でけぶる視界の遙か彼方まで城壁が続いている始末だ。

そこを家二十軒分くらい歩いたところで、彼は足を止めた。

「キリが無いな……」

もう戻って、ゲルの飯屋で適当に時間を潰そうかと、踵を返したその時だ。

「……………っ」

覚えのある気配がした。

瘴気と呼ぶのが適当かもしれない。独特の淀んだ魔界の気配を感じたのだ。

聖夜を控えて、王宮では様々な行事と共に清めの儀式も行われるはずだ。

それなのにこんなに濃い瘴気を残しているという事は、異常以外の何物でもない。

僅かに視線を鋭くしたエイドフェルトは周囲を見回した。



幸いにして、この辺りには城門が無く、人通りも殆ど無い。

少しだけ膝を曲げて、彼は地面を蹴った。

ひらり、とその体は宙を走り、あっという間に城壁の上に乗り上がった。成人男性四人分はあろうかという高さを、だ。

衛兵が歩く為の通路を数歩で横切り、すぐさま彼は音も無く城内に降り立った。

そこは、木がまばらに生えた庭園の一角のようだった。

歩き始めれば、短く刈られた下草がさくさくと音を立てる。

エイドフェルトが感じ取った瘴気はもう少し先の方から流れて来ているようだ。

進んでいくにつれて、彼はそこが奇妙な場所だという認識を強くしていった。

ぼつりぼつりと御影石や大理石で造られた聖人の像が置かれている。

腕にぞわりとした寒気を感じた。

明らかに聖域を模して、聖なる力を放っているのだ。

「礼拝堂が、あるはずだけど……。いや、その前にこの瘴気の正体を調べるのが先か」

そう決めたエイドフェルトは更に奥へと歩を進めた。

やがて一棟の塔が姿を現した。暗い色の煉瓦で造られた円筒型の塔だ。入り口は門や錠で閉ざされ、窓は小さくて少ない。

そして、一つ合点が言った。

全ての聖人像はこの塔を中心として立てられているのだ。

「つまり、この中には悪魔か、それに類するものが囚われているのだな」

その囚われたものがこの瘴気をまき散らしている、と考えるのが妥当な線だろう。

塔の近くに立つ巨木の下に佇んで、エイドフェルトは腕を組んだ。

足を踏み替えて重心を右から左に移動したその時だ。

「貴方、誰!？」

高く澄んだ声が頭上から響いた。

はっとエイドフェルトが見上げると、そこには金色の長い髪を下ろした少女の姿があった。

白い肌と整った顔立ちは美しいが、それ以上に彼の目を奪ったのは彼女の太陽のように輝く金髪だった。

……まるで黄金の滝のようだ。

自分でも陳腐だと思つ台詞を心の内で呟いてしまった。

一方で、木の上の少女は眦をきつくして彼を詰問してきた。

「ここは王家の者以外立ち入りを許されてはいないわ。一体ここで何をしているの！」

王家の者以外の立ち入りを許されていないという事は、つまり、彼女は王家の人間という事になる。

下手に嘘を吐いても直ぐに知られてしまつたろう。

エイドフェルトはあっさりと決断した。

胸に右手を当てて、小さく礼をする。

「勝手に入ったことはお詫び致します。私はアルイプス公爵、エイドフェルトと申します。こちらで……」

瘴気を感じて、と説明したところで信じてもらえるだろうかと考えた時、先を奪つように少女が声を上げた。

「アルイプス公爵ですって？」

再び見上げると、少女は彼の頭二つほど高い木の枝から軽やかに下りて来た。白いドレスの裾がふわりと広がって、彼女の足を包み込む。

そして少女はエイドフェルトに詰め寄ると、彼を見上げて問い掛けて来た。

「貴方がアルイプス公爵？ …………… 悪魔の公爵なの？」

今度はエイドフェルトが驚く番だった。

アルイプス公爵の名を使ったのは、最高位の貴族だという事を示したかったからだ。悪魔の爵位だと知られるなどとは思ってもよらなかった。

そう、エイドフェルトは確かに悪魔だ。

公爵という高位の爵位が示す通り、彼は悪魔としても最高位の力を持っている。ただし、アルイプス公爵は他の悪魔とは違う使命を担っている。その為に、彼は度々人間界を訪れているのだ。

アルイプスの名を知るということは、その使命の内容までこの少女は把握しているのだろうか……。

そう思いながら、彼は少女に頷いた。

「そうです。何故、貴方はアルイプス公爵をご存知なのですか？」

にわかに警戒しながら、エイドフェルトは彼女にそう聞いた。

ところが少女は少し俯いて、考え込むような姿勢で黙り込んでしまった。

そう長い時間は掛からなかっただろう。

やがて彼女は顔を上げた。

「話があるわ」

少女が切り出したのは、そんな言葉だった。

それだけ言って、彼女はエイドフェルトに背中を向けて歩き出した。

小さな背中が「黙って着いて来い」と言っていて、仕方が無く彼はその後に続いた。

連れ立ってやって来たのは小さな建物だった。

白く塗られた煉瓦の壁に木製の両開きの扉、窓にはステンドグラスが嵌っている。

ティータイムや休憩に使う東屋だろうか。

少女が扉を開けるのを見ながら、エイドフェルトはそんな風に考えていた。

彼女は内開きの扉を体で抑えながら、彼を中に促した。

「どうぞ。入って」

建物の中に入って天井を見上げた瞬間、彼はその清浄な空気に気が付いた。

ここは聖域、……礼拝堂か何かだ！

少女を驚かせない程度の速さで振り向いた、その鼻先で扉が閉じられた。

「なっ………！」

両手で扉の取っ手を掴もうと腕を伸ばすが、ばちっと火花が散るような衝撃を受けた。

恐らく十字架か何かで扉に封印を施したのだろう。

伸ばした手は引っ込めざるを得ない。下手に触れれば魔力が消費されるだけだ。

「閉じ込めて、どうするつもりなんだ………」

己の失態にいささか呆然としながら呟くと、扉の向こうから少女の声が聞こえた。

「ごめんなさい。後で必ず戻ってくるわ。それまでは、どうかここで大人しくしていて頂戴」

遠く、中年の女の声が聞こえた。

『姫様ー、どちらですか。隠れたって駄目ですよ！』

少女にもその声は聞こえたらしく、彼女は「もっっ」「とむずかる様に叫んだ。

「ばあやったら、二時間くらい放っておいてくれれば良いものを」  
それから扉越しに再びエイドフェルトに話しかけて来た。

「約束するわ、必ず戻る。……私はシール。必ず、戻るわ」

言い終わると、軽い足音は遠のいていった。

残されたエイドフェルトは、手近に置いてあった長椅子に腰掛けて足を組んだ。

長い溜め息を吐いた後、ぽつりと呟く。

「……真名では無い愛称で約束をされても、ね」

悪魔に対するその行為は、単なる口約束よりも軽い、軽すぎる契約だった。

## 白の礼拝堂

礼拝堂に一人残されたエイドフェルトは、ぼんやりと窓を見ていた。

神の子の誕生を表現したステンドグラスは、職人入魂の作品なのだろう。緻密なデザインを豊かな色彩で描き出している。

やがて日が傾きだす。

赤い陽光がステンドグラスの色合いを変化させ、差し込む光は長く細くなる。

そして、暗闇が訪れた。

エイドフェルトはゆっくりと瞬きをする。

その目に映るのは、少しだけ灰色がかった室内だ。

歩き回ろうが、家捜しをしようが、悪魔である彼にとって何の不都合も無い。

しかし彼には何をやる気も無かった。

「動き回っても、魔力を消費するだけだしなあ……」

シーレと名乗った少女が去った後、ずっと長椅子に座ったままだったエイドフェルトは、肘掛けに体重をかけて呟いた。



本当を言えば、この礼拝堂にいただけで魔力は消費されてしまうのだが、以外と長い時を生きている彼はそれを最小限にする術を心得ている。

更に言えば、彼は結構腰が重い方だ。一度歩き出せばその後はすいすい行けど、そこまでの道のりが長い。

例えば、今。一度こうやって座ってしまつと、暇を潰す物が手元に無くて、彼はそこから動きたいと思わなくなってしまうのだ。

「ふうむ……。ここで朝日を迎えるのも悪く無いかな」

はたまた「それともいつそ眠ってしまおうか」なんて考えてはみるものの、脳裏には先程の少女の姿が鮮明に甦る。

太陽そのもののような金色の髪。銀色が混じった様な澄んだ緑の瞳。警戒する様な表情。それから、「必ず戻る」と約束した声。

無理矢理ここから出る事も出来なくは無いが、少女の、シーレの記憶がそれを押し止めるのだ。

アルイプス公爵の役目柄、人間と接する事には慣れている。

だが、こんな風に彼を留めようとする力は初めて感じていた。

「うん。……彼女は約束を守るか、破るか！」

エイドフェルトは胸ポケットからコインを一つ取り出して、ぱちんつと親指で弾いた。

くるくると宙を飛んだコインを、左手で右手の甲に押さえつける。彼が左手を持ち上げたようとした時、軽い足音が近づいてくるのが聞こえた。

コインは、……表を向いていた。

\*

足音は真っ直ぐにエイドフェルトのいる礼拝堂に向かって来た。

扉の脇にあるステンドグラスの向こうで、ランプの淡い光が揺れているのが見えた。

その光が扉の影に隠れた後、ペシペシと扉を叩く音がした。

「……遅くなってごめんなさい。私よ、シーレよ」

コインを胸にしまいながら、エイドフェルトは立ち上がり、ゆっくりと扉に近づいた。

「うん。突然閉じ込められた割には大人しく待っていたつもりなんだけど、どう？」

「……………」

扉の向こうのシーレは、沈黙した。

どう？ と聞かれても、どう答えたものか分からなかったからだ。だからその問いを無視して、本来の目的を貫こうと決めた。

「……貴方は、本当に魔界のアルイプス公爵なのよね？」

「スルーされるのは慣れているよ。ま、いいか。そう。アルイプス公爵エイドフェルトと申します、姫君」

見えないと分かっているけど、彼は彼女に貴族らしく礼をしてみせた。

「姫君なんて呼ばないで。質問に答えて。貴方は此処に、“仕事をしに”来たの？」

わざわざ強調して言われて、そこでエイドフェルトはシーレがアルイプス公爵の使命について詳細に知っている事に気が付いた。

では何故こんな問い掛けをして来るのか。

推測するのは簡単だ。あの瘴気を放つ塔に関係があるのだろう。正確には塔の中に囚われているものに、だ。

ほんの少し笑みを作って、エイドフェルトは逆に聞き返した。

「そのご質問に答えれば、此処から出して頂けるのでしょうか。シーレ？」

「……貴方にとってはただの“仕事”で、“使命の遂行”、かも知れない。けれど、わたくしにとっては重要な意味を持つ。答えな

さい、 エイドフェルト！」

悪魔、人間に関わらず、真なる名前を知られる事は支配権を奪われる事に等しい。

だからエイドフェルトは自分の持つ長つたらしい真名を彼女に名乗ってはいなかったが、それでもシーレの一喝は不思議な束縛を彼にもたらした。

縛られる事を嫌うエイドフェルトだが、この束縛は不思議と不快では無い。

それは、彼女の言葉や態度が人を従える為のものだからかも知れないし、そうでは無い理由からかも知れない。

自然とエイドフェルトの口角は上がっていた。

「ご質問の答えは『いいえ』です。私は賑やかなこの街に興味を抱き訪れただけですよ。そして王宮に忍び込んだのは、あの塔から漏れ出す瘴気を追って来たまでの事」

「……………そう」

礼拝堂の扉に額を押し付けて、シーレは安堵の溜め息を吐いた。

良かった、と言う小さな呟きを、エイドフェルトの敏感な耳は拾い上げていた。

けれど彼女は直ぐに顔を上げた。

扉越しでも、エイドフェルトを見据えながら言い放つ。

「では、今度こそ、交渉を。わたくしの要求をのんでくれればこの礼拝堂から出しましょう」

「ふうむ……。その要求は私に可能なことでしょうか？」

魔界の住人に対して、“契約”では無く、“交渉”と来た。

本当にこの少女は面白い、とエイドフェルトは内心でほくそ笑む。

「可能だわ。わたくしを、塔の中に連れて行ってくれればいいのよ」

「あの、瘴気が漏れ出す塔の中へ？」

「ええ、そうよ。現アルイプス公爵に出来ない、などとは言わせないわ」

強い口調で、シレーは言った。

彼女には確信があった。知識で知っていた。

高位の悪魔たるアルイプス公爵の持つ力は、そこらの悪魔が束になろうとも叶わない。そうで無くては、困るのだと。

「どうも、貴女はアルイプス公爵について良く知っているみたいです。その理由をお聞かせ願えますか？」

「……………」

エイドフェルトの問いに、シーレは答えを返すことを逡巡した。

彼女は幾つかの理由から、彼が本物のアルイプス公爵だと判断した。

王宮内に作られたあの聖域の中を平然と歩き、人間である自分に敵愾心の欠片も見せず、“アルイプス公爵”を名乗った為だ。悪魔であることをあっさり認められた事も、勿論含まれる。

悪魔は偽証する事が得意だが、自分より高位の悪魔を名乗るのにはそのなりの覚悟があると彼女は聞いていた。

自分より高位の悪魔とは、すなわち、単純な実力に差があるという事だ。その実力の高い存在に偽証した事実が知られば、粛正の対象となり、どんな目に遭わされても文句は言えない。

だから、高位悪魔の名を偽証する事は殆ど無いという事だった。

それでも、全てを彼に明かすべきかどうかは、悩まざるを得ない。

結局、シーレは決めた。

そつと扉に触れる。

「……わたくしには腹違いの兄がいるわ。その兄の母君こそ、前アルイプス公爵なのよ」

エイドフェルトは驚きに目を見張った。

「アゼドフェルトが……!?!」

その名前を聞いて、シーレは確信した。彼は本物のアルイプス公爵だと。

身を乗り出して、扉に両手をつけて口を開く。

「そうよ。兄は半分悪魔。自身の力を抑えきれない為、あの塔と聖域を造り、彼をそこに……」

「閉じ込めた？」

先程の衝撃を拭い去ったエイドフェルトは、彼女の台詞の続きを言った。

「……………っ！」

息を呑み、一瞬黙り込んだシーレは、扉のノブに掛けていた十字架の鎖を解いた。その十字架と鎖を扉の下に一直線にして置くと、簡易結界の出来上がりだ。

ちゃりちゃりという金属音に、エイドフェルトは首を傾げる。

次の瞬間、礼拝堂の扉が勢い良く開けられた。

ぎりぎり扉の攻撃を食らわずにすんだエイドフェルトの髪が、風に煽られて乱れた。

彼の視線の先には、仁王立ちするシーレの姿があった。

美しい金の髪がランプの明かりできらきらと輝いている。

「怒鳴りつけるなら、面と向かってするのがわたくしの主義なの…」

ふるふると両手に作った拳を振るわせて、シーレは肩を怒らせた。

「陛下はっ、お父様は、お兄様を愛していらっしやるわ！でも、同じ様にこの国を愛しているの。愛する者が愛する国を害する事の無いよう、最善を尽くそうと努力為さった結果よ、これはっ。何も知らぬ者に侮辱される謂われは無いわ！」

朝露に濡れた葉のような瞳は、今はただ怒りに燃えている。

彼女とて、囚われた兄を想っていない訳では無いし、そうせざるを得なかった父を非難したい一方で心から敬愛しているのだろう。

エイドフェルトは僅かに瞳を伏せ、それからシーレを真っ直ぐ見つめた。

「申し訳有りませんでした。部外者が口を挟んでいい事ではありませんでした」

ひた、とシーレの瞳は彼を見据えていた。

けれど、先に視線を外したのは彼女だった。

小さく首を振り、「いいえ」とそう言った。

「貴方にとって見れば、同胞を囚われている様なものでしょう」



「……………」

「兄の母君は時を置かずに亡くなられたの。出来る事ならば魔界に連れて行きたかったと、お父様はそう言われたわ。それこそが最善だったのじゃないか……。けれど、只人であるわたくし達にはどうする事も出来なかった」

悔しそうに、彼女は唇を噛み締める。

「陛下が父君ということは、貴女は王女殿下ですね」

そうエイドフェルトが尋ねると、彼女は素直に首肯した。

そして、兄がいて、その兄が塔に囚われているという事は、つまり……………」

「此度、戴冠される王太子殿下とは、貴女ですか……………」

「女王が珍しいとも言いたいの？」

きつと見上げてくる少女に、エイドフェルトは困った様に微笑んだ。

「いいえ。天上の神の教えを守る国の長であれば、他の悪魔と契約を結び魔界への扉を開く事も出来ないでしょう。貴女が言う通り、今上陛下は最善の策をとられたと、そう思います」

戸惑う様に、シーレは視線を揺らし、そして囁くように言った。

「有り難う……………」



## 黒の塔

十字架とその鎖で作られた結界はシーレの手によって解かれた。

やれやれと首を掻きながら、エイドフェルトはついさつきまで出られなかった（正確に言うとなかったのだが）礼拝堂の出入り口を通り抜けた。

ランプを持つシーレは、黒いドレスに厚手のシヨールを羽織って佇んでいた。地味な衣装は人目を避ける為だろうが、むしろ輝く金の髪を引き立てているだけだと思ってしまうのは、エイドフェルトがそれに酷く惹かれていた為だろうか。

少女の視線は、少し先にある塔に向けられている。

人間の目では、もはや闇に同化して見えない筈なのに、その瞳は真摯にそちらを見つめていた。

「……塔に入れれないという事は、貴女は鍵を持ってはいないということですか？」

少女の視線はちつともこちらを向かない。それがエイドフェルトには少し面白く無い。だから、振り向かせる意図を持って彼女に話しかけた。

シーレはくりりと振り返ると、頭一つ半程高い位置にあるエイドフェルトを見上げて言った。

「あの塔の鍵はお父様しか持っていないし、わたくしはお兄様との

接触を禁じられているの。食事を差し入れる窓は小さすぎて体が入らないし……」

それから、迷う様に視線を揺らして、眉間に皺を刻んだ。

「……貴方に会った時は、一番低い位置にある窓によじ上れないかと思って、失敗したところだったのよ」

「ああ、それで木の上にも！」

得心がいったエイドフェルトは、ぼんつと手を打った。

すると、みるみるシーレの頬が朱に染まる。流石にはしたない事をした自覚はあるようだ。

「だ、だから貴方に頼んでいるのよ。壁を擦り抜ける、なんて言わないわ。その窓から、わたくしを中に入れて欲しいの！」

早口でそう言って、シーレはすたすたと歩き始めた。

髪の間から覗く耳はにわかには色づいている。

威丈高な物言いは照れ隠しにも使われるらしいと知って、エイドフェルトは彼女にはれないように微笑んだ。

塔には直ぐに辿り着いた。

昼間に来たときよりも黒く、大きく見えるのは、瘴気の量が増えているからかも知れない。

瘴気というものはつきり感じられる訳では無いシーレでも、得体の知れない迫力を感じる。そっとランプを持つ方の腕を擦った。

エイドフェルトは少女の無意識の仕草に気が付いたが、知らない振りをして口を開いた。

「あの木の近くにある窓でいいですか？」

「あつ。ええ、そう。そこをお願い」

「一番上の窓でも大丈夫ですが、どうします？」

シーレの顔を覗き込むようにして尋ねると、彼女はきょとんと瞬いた。

「そんなことが出来るの？」

「ええ。問題有りませんよ」

彼が頷くと、シーレはあっさりと言った。

「では、一番上の窓でお願い」

エイドフェルトがその言葉につこり微笑むと、その笑みの意味が分からず、シーレは首を小さく傾げた。

「では、失礼」

一言断って、エイドフェルトは彼女をひよい、と抱き上げた。

シーレの口が悲鳴を零す前に、彼は地を蹴って、あっという間に一番高い位置にある窓の枠に足を乗せていた。窓はシーレの許可を得る前に開けておいたから、何の障害も無い。

いや、二人が通るにはちょっと窓が小さい事は難点と言えるが、それでもエイドフェルトが体を縮めれば何とかだった。

かつり、と石の壁にエイドフェルトの靴音が響く。

シーレの持つランプの明かりが周囲を照らす。

彼女を床に下ろして、向かい合って立つ。

ほっ、と安堵の息を漏らしてから、シーレはエイドフェルトを見上げた。

「有り難う」

「どうぞ致しまして」

素直なお礼の言葉に、エイドフェルトもまた素直に微笑んで返答した。

この返答をすると魔界では奇妙な顔をされるのだが、人間に対して行くと、彼らは一様に嬉しそうに微笑み返してくれるのだ。

彼の中では結構気に入っている行為なのだが、目の前の少女はそれに対して小さく頷き返すだけだった。

むっ、とエイドフェルトの中に晴れない霧のようなわだかまりが

残った。

ところがわだかまりを残した当人は、塔の内部の方が気になるらしく、ランプを高く掲げて周囲を見渡していた。

がらん、とした何も無い空間だ。

円形の空間の右手には下へと通じる階段。左手には上へと通じる階段があるだけ。

「お兄様はきつと上ね」

そう言って、シーレは上へ向かう階段へと足を向けた。

エイドフェルトはその後ろに黙って着いて行った。

それに気が付いたシーレは、首だけ振り返って言う。

「どうして一緒に来るの？」

問われた方は肩を竦める。

「ここまで来たのですから、塔の下までお付き合いしますよ。……いえ、お付き合いさせて下さい」

くすりとシーレは笑った。

「邪魔をしなければ構わないわ」

\*

螺旋を描く階段は意外と長かった。

その時間を利用して、エイドフェルトは気になっていた事をシーレに問いかけた。

「何故、今、兄君にお会いしようと思ったのですか？」

答えは彼が思うより早く返って来た。

「わたくしが戴冠してしまうからよ」

「ますますわかりませんね。戴冠なされば、この塔とて貴女の管理下に置かれるでしょう」

国の最高権力者となるのだから出入りは自由でしょう、と彼は続けた。

けれど、シーレは首を振る。

「違うわ。わたくしが戴冠する前に、お兄様に会いたいのよ。……いいえ、会わなくてはいけないの」

更に問いを重ねる前に、彼女は言った。

「わたくしは王となる為に教育されてきたし、わたくし自身もこの国を守り育てる母のような、そんな存在になりたいと思っているわ。けれど、お父様の長子は、本当はお兄様なのよ。わたくしでは無い



の

その口調ははっきりとし、彼女の意志の強さを滲ませる。

「お兄様に対して引け目を感じていないと言ったら嘘になるわ。結局のところ、わたくしは色々と制約はあっても自由に生きているわ。けれど、お兄様は？ 囚われて、全ての自由を奪われている。だからわたくしは、知らなくてはいけないの。全てを知って、全てを背負って、王となるのよ」

お父様に言ったら、理想論だと笑われるわね。

掠れた声で、そう付け加えた。

エイドフェルトは、酷な質問だと分かっているけど、尋ねずにはいられなかった。

「全てを知った貴女は、兄君をどうするのですか？」

足を止めて、シーレは振り返る。

緑の瞳は、冷やかな印象を纏っていた。

「この国にとって最善となることをするわ。たとえば、お兄様を永遠にこの塔に閉じ込めることになっても、わたくしはそれを行うわ」

これもまた、王者の持つべき一面なのだ、エイドフェルトはそう思わずにはいられなかった。

彼女の覚悟を噛み締めるように、彼はゆっくりと瞳を閉じ、そし

て開いた。

「では、行きましょう。全てを知る為に」

「……ええ」

エイドフェルトの言葉にシーレは頷いて、再び階段を上り始めた。

## 闇の腕

長い長い階段を上り終えた先は、窓から入って来た時のような空虚な空間だった。

あまりの暗さに、シーレは手に持ったランプを高く掲げた。

「あっ……………」

そして、言葉を失った。

円形の空間の半分を仕切っているものが、鉄柵以外の何物でも無かったからだ。

王となるべき教育の中には血生臭い話とて勿論あったが、シーレが本物の牢、あるいは人を閉じ込める為の檻を見たのは初めてだったのだ。

その奥で、もぞり、と黒い固まりが動いたのに気が付いた時、彼女は思わず駆け寄っていた。

「お兄様?!」

ランプの明かりが黒い固まりの正体を暴いて行く。

それは、踞った人間だった。

黒い毛布の様なものを肩からだらりと下げ、絡まり合った黒髪は胸に届く程長い。

彼は、酷く億劫そうに頭を持ち上げた。

牢の中は決して不潔では無い。

寝台や小さな机といった必需品以外に物は殆ど無く、何か特殊な力が働いているのか、床には塵一つ見当たらない。

それでも、牢の中の男が顔を上げた瞬間、エイドフェルトは生き物の腐った臭いをかいた時の様な嫌な感覚を覚えていた。

「……………おに、い、さま？」

掠れた低い声が、シーレの台詞を繰り返した。

彼女は鉄の柵の前に膝をつき、夢中で彼に話し掛けた。

「ええ、そうです。貴方の妹のシーレですわ」

「いもう、と」

「はい」

シーレが頷くと、黒髪の男は、ひたり、と手の平を床に這わせた。

一歩、這いずるようにして前に進む。

「シー、レ？」

「はい、そうです」

再び頷く彼女に、彼は肩を震わせた。

かたかたと全身を揺らしながら、床に伏せるように俯く。

「お兄様、お加減が悪いのですか？」

慌てたシーレの呼び掛けに、彼は「いいや」と先程よりはっきりとした声で応じた。

「いいや、むしろ、どンドン、気分はよくなる一方だよ。可愛い、シーレ」

その声は、異様な雰囲気放了た。

ぞくりと、シーレの二の腕は一気に粟立つ。

「ふ、ははっ……………」

まるで床の底から、笑い声が響いたようだった。

がばり、と頭を振り上げた男は、高い声で笑い出した。

繰り返し、繰り返し、真っ白い喉の奥から吐き出される笑い声が、ぐわんぐわんと石の壁に反響する。

「ああ。はははっ、はは！ ようやく会えたなあ。なあ、シーレ？」

そう言って、彼女を見つめたその瞳は、血の様な赤だった。

ばらばらと落ちてくる黒髪に時折隠されながらも、その瞳は爛々とした光を宿している。

「お、にいさま……?」

たどたどしい口調で呟いたのはシーレだ。

そんな少女に、兄は邪悪な微笑みを浮かべた。

「やあ。なんにも知らない幸福の王女様」

その台詞に、シーレは瞳を見開いた。

妹の反応を、心底から楽しそうに男は見つめながら、口を開く。

「僕の母親は悪魔、君の母親は人間。そうだろうか?」

「……ええ、そう聞いています」

唐突な話の展開に戸惑いながらもシーレは答えた。

だから、彼はこの塔に囚われているのだから。

「真実を知らされない哀れな王太子殿下」

ずり、とまた一步、男は床を這って前に進んで来た。

「僕と君はただ一つの点を除いて、全く同じものなんだよ」

「全く同じ……?」

舌なめずりに似た笑みを漏らしながら、男はまたシーレに近づく。

何か怪しいものを感じたエイドフェルトがシーレの背後に近寄るが、シーレも、彼女の兄も互いの存在以外が目に入っただけはなかった。

「そう。父も、……母も、僕らは同じなんだよ」

「嘘」

咄嗟にシーレはそう答えていた。

また、嬉しそうに、男は笑った。

「嘘じゃないよ」

ずり、とまた近づく。

「君も悪魔の血を引くんだ。でも、悪魔の性質を継いだのは僕だけ。光り輝く父親の性質は全て君に行っただ」

彼はそう言って、短くなっていたシーレとの距離を一気に縮めた。がしゃんっ、と柵がけたたましい音を立て、シーレはびくりと肩を竦めた。

「呪われるっ、黄金の娘！ 滅びてしまえ、こんな国！」

禍々しい呪いの言葉を吐きつけて、男はその青白い腕を柵の隙間

から伸ばして来た。

黒い鋭い爪がシーレの肌を引き裂く直前に、その細腰をエイドフェルトが引き寄せた。

男の爪は空ぶって、再び柵を騒がしくさせた。

けれど男は、そんなこと構うものかと言うように、甲高い声で笑い出した。

絶え間ないその笑い声は、悪魔の持つ狂気に慣れているはずのエイドフェルトでも嫌悪感を抱く程のものだった。

彼は腕の中で震えるシーレを抱き上げて、その場を後にした。

\*

自分から入るのはどうかと思っただが、エイドフェルトが知っている腰を下ろせる建物は礼拝堂しか無かった。

仕方が無く彼は礼拝堂に入って、長椅子の上に彼女を下ろした。

震え続ける小さな肩に自分の羽織っているコートを掛け、彼女の前にしゃがみ込む。

「……双子だったんだね」

わざと、敬語は使わなかった。



そのお陰か、シーレの反応は早く返って来た。

「……知らなかったわ。本当に。本当に知らなかったの」

「ああ」

エイドフェルトの静かな言葉に、シーレの彷徨っていた視線は彼に向いた。

「ねえ、こんな事は良くあるの?」

「こんな事?」

首を傾げるエイドフェルトに、シーレはもどかしそうに首を振った。

「人間と悪魔の間に生まれた子どもは、悪魔ではないの? 人間にもなるの?」

混乱して取り乱す少女に、エイドフェルトは自分の知りうる事実を教えた。

「わからない。殆ど前例が無いんだ。だが、大抵は悪魔の性質を持って生まれて来ると言われている」

「じゃあ、どうして私は悪魔じゃないの? お兄様だけが、悪魔の扱いを受けるの?」

エイドフェルトの肩をぎゅっと掴んで、シーレは頂垂れた。

「人間と悪魔と、それは一体何で分けるといの!？」

悲しみをいっぱいに含んだ声で、シーレは叫んだ。

彼女の小さな背中に腕を伸ばして、エイドフェルトは答えを返した。

「瘴気だ。人間は瘴気を纏うことだけは出来るが、悪魔はこれを生み出したり操ったりする事が出来る。……貴女も分かっているだろう?」

シーレを抱き寄せれば、彼女は素直に彼の肩に顔を埋めた。

「兄は、イーネは、生まれた時から瘴気を発していたと聞いているわ。それに、今の彼は、自分の意志で、瘴気を私に、私に向かって……」

首を振り、その事実を認めたく無いとするシーレに、エイドフェルトは酷な事だと分かっているとお言葉を紡いだ。

「あの聖域が無ければ、彼は恐らくあの瘴気で人も殺せるだろう」

びくりと、彼の腕の中で、シーレの体が揺れた。

「わかっているだろう、彼はもはや引き返せない」

「狂気でいっぱいだった……。国への、いいえ、わたしたちへの憎しみが積もってしまったのだわ」

告げなければならない。

エイドフェルトはそう思った。

「彼は、恐らく戴冠式の時を狙ってあの塔を脱するだろう」

「戴冠式で……？ その日は聖夜よ。最も悪魔が弱る時だわ」

それは事実だ。だからエイドフェルトも同意を示して頷く。

けれど、彼女が取り零している事実も告げる。

「そう。だけど、この街に限っては、隙が出来てしまうんだ」

「隙……？」

「それこそが戴冠式だよ。聖なる力とは、結局のところ人間の祈りや願いの心に左右される」

はっ、とシーレは顔を上げた。

「つまり、戴冠式に皆の心が、聖なる力が集えば、塔の周囲の聖域の力が弱まると言うの？」

エイドフェルトは頷く。

そして、彼女ならば容易に察するだろうと思いつながらも、口を開いた。

「彼が戴冠式で何かを行うならば、それは私の“使命の遂行”を意

味するんだ……」

## 光の温もり

「姫様、お時間です」

細かな金細工が施された扉を開いて、シーレの乳母が彼女に声を掛けた。

窓の外には雲一つ無い夕暮れの空が広がっている。

その青を背景にして立つシーレの姿を見て、乳母の少し瞼の垂れた瞳が潤み出す。

「ああ、お美しゅうございます……。ばあはこの日をどれ程夢見た事か」

感極まって泣き出す乳母に、シーレは苦笑する。

「お願いだから、その涙は戴冠式が終わるまでとっておいて頂戴」

「そ、そうですねっ。すぐ、すぐに涙など止めてみせますからっ」

ぐすぐすと鼻を鳴らしながら、乳母はハンカチで顔を覆った。

金や銀の飾りが随所に散りばめられた真っ白なロングドレスの裾を引きながら、シーレは彼女に歩み寄った。

長い髪は上半分だけ細かな三つ編みで結び上げて、赤い石をあしらった金の髪飾りで飾っている。肩からは紅の厚く豪華な飾り帯を掛け、それがずっしりとした重みを感じさせる。

「これが王太子の正装なのだ。」

「ばあや。……これまで尽くしてくれた事に感謝するわ」

「……姫様」

皺の目立つ両手を、手袋をはめた手でぎゅっと握れば、乳母の瞳からは一層大粒の涙が零れてしまった。

「ひ、姫様……、勿体無いお言葉です。ばあは、姫様の晴れ姿を見る事が出来て、それだけで十分でございます！」

「あら、それでは困るわ」

わざと大きさに驚いてみせると、乳母はきよとん、と目を丸くする。

「ばあやには、これからもわたくしと共に居て貰わなくてはいけないのよ？　これで満足されては困るわ」

くすくすとシールが笑えば、何度も瞬いてから、乳母もようやく笑みを浮かべた。

「そうですね。寝穢い姫様を起こせるのは、世界中で、ばあくらいしかないですものね」

「あら、その言い様は酷いわ」

冗談めかして話す二人に、周囲の女官たちも思わず笑みを零した。

けれど、そんな穏やか時間を長引かせる訳にはいかない。

シーレはやがて、決然と顔を上げた。

「では、行きましょう」

戴冠の他に、兄との対決が待っているであろう大聖堂へ。

\*

徐々に夜へと時が移り変わる中、式は粛々と進んだ。

大聖堂の最奥に置かれた祭壇の両脇、手前から見て右手に現国王が座り、左手に王太子が座っている。

中央に広い通路を残して、半円状に広がっている長椅子に重臣や高位貴族たちが座る。

今は、大司教の祈りの言葉が高くアーチを描く天上に朗々と響き渡っていた。

これが終われば、到頭戴冠の儀となるのだ。

そして、大司教は祈りを終えた。最後に神の子の名を口にして、皆がそれに続いて同じ名を唱和した。

ゆっくりと、シーレの父である現国王が椅子から立ち上がる。

重々しい歩みで中央まで進み出て、祭壇の上に置かれたレースの様に微細に作られた王冠を手にする。

シーレもまた立ち上がり、慎重な足取りで進み出た。

王の前に膝を着き、彼を見上げる。

「汝、民と国を愛し、その父となり母となることを誓うか……」

大司教のものよりぐっと低い声が、厳格な言葉を紡ぐ。

「誓います」

シーレは迷いを持たず、答えた。

「汝、揺るぎなき新年と弛まぬ歩みを持って、民と国を導くことを誓うか……」

「誓います」

瞳を逸らさないシーレに、王は小さく頷いた。

「その誓いを違わぬ限り、汝が王たる事をここに宣言しよう」

列席した全員が息を呑んだ。

こうなる事を知っていても、この張り詰めた空気の中ではそうせざるを得なかったのだ。



シーレは黙して、頭を僅かに垂れた。

王冠を持った王の手が下ろされ、彼女の頭に触れる瞬間だった。

王は違和感を感じた。

ぴたり、と動きを止めて、顔を上げる。

彼の視界の端では、シーレが立ち上がっていた。

その不調法を、王は嗜める事が出来なかった。

目の前には有り得ない光景が広がっていたからだ。

時が止まっていた。

王の立つ最上段から見える全ての人間が動きを止め、微動だにしない。

動いているのは自分と、娘であるシーレだけだ。

シーレは、静かに視線を大聖堂の扉の方に向けている。

王冠を祭壇に戻して、娘に声を掛けようと王が口を開いた時、こつり、と扉側から靴音がした。

振り返ったその目には、一人の青年の姿が映った。

列席していた貴族の一人だったようで、彼らの背後から現れたのだ。

「誰だ……?」

訝しんであげた声に、彼は答えなかった。

代わりのように、シーレは彼の名を呼んだ。

「エイドフェルト……。来るのね?」

彼女の問いに、エイドフェルトは頷いた。

黙って、祭壇へと続く通路の真ん中辺りを指差す。

そこには、闇が凝っていた。

ぐるぐると渦巻くような闇だ。

やがて、その闇が持ち上がる。

闇は徐々に人の姿を形作る。纏れた黒髪、白い?けた頬、はつきり見える鎖骨、漆黒の衣装。

その姿に、王は声を上げた。

「……イーネ!」

呼ばれた当人は、焦点の合わない赤い瞳を王へと向ける。

そして、にんまりと唇の両端を持ち上げる。

「これは、これは、国王陛下。父上様」

楽しそうに、可笑しそうに、笑う。

「それから、可愛い妹、シルエスタ。その王冠はさぞや君に似合うだろうねえ」

「……お兄様」

哀しげに漏れたシーレの言葉に王は目を見開く。

「シーレ！ お前はイーネに会ったのか！」

シーレは父の方を向けなかった。

禁じられた事をした気まずさからでは無く、兄の挙動から目を離せなかったのだ。彼は王を害そうと考えている筈だ。だが、一体何をするのか、全く予想がつかない。

黙ったままの彼女に代わって王の詰問に答えたのは兄、イーネだった。

「可愛いシーレは、哀れな兄に会いに来てくれたのですよ。父上様？」

彼の父を呼ぶ言い方はとてもわざとらしい。

それは聞く者の癪に酷くさわった。

けれどイーネは構いもしない。

「そうして騙されていた王女様は真実をお知りになられました。そう、悪魔の子どもであるという恐ろしい真実を！」

甲高い声で、けたけたと笑う。

「だから、もう、いいでしょう？」

「何を言っている、イーネ……」

こくり、と首を横に傾けて言った息子の台詞に、王は戸惑った。

シーレは咄嗟に王の前へと進み出ていた。

真っ赤な舌で青の勝る唇を舐めたイーネは、その瞳をぎらつかせた。

両目の焦点を一点に合わせ、床を這うように駆け出した。

一直線に、王の、その前に立つシーレの元へ。

塔の中で起きた事の再現のように、黒い鋭い爪がシーレへと迫る。

けれど今回はエイドフェルトは動かなかった。

シーレが一つの名を呟く事を知っていたからだ。

「イニエスタ・フォロウ・デアリング」

後一步、そういう位置で、イーネの足が止まった。

周囲の人間と同じに時を止めた様に体が動かない。

「それは、僕の、真名、か……？」

かろうじて動かせる唇がぎこちなく問いを発した。

シーレは彼に歩み寄り、動かないところを無理矢理に動かそうと  
している腕をそっと取った。

「ええ、そうよ。イニエスタ」

節くれ立ったイーネの指は肉が殆ど無く、冷たくて固い。

シーレは冷えた手を暖めるように両手で兄の手を握った。

「イーネ。わたくしたちが憎い？」

妹の問い掛けに、兄は即答した。

「憎いと、思わない方が、可笑しく無い？」

答えは分かっているけど、それでもシーレは苦しかった。

「こんな仕打ちをして来て言えたことでは無いのはわかっているけれど……。どうか知っていて。わたくしもお父様も、イーネを愛しているわ」

「馬鹿、じゃないのかい？ それこそ、今更、だ」

「そうね。けれど、知っていて欲しかったの」

びくり、とイーネの指先が動いた。

もう猶予は無い。魔力を持たないシーレが、真名を持って彼を縛り付けるのにも限界があるのだ。

「イーネ。この国を、害そうと思っているの？」

シーレの言葉に、イーネは目を丸くした。

「そう考えていないのに、こんなところに、出て来ると思っているの？ 呪って、真っ黒にしてやるさ。滅びればいいんだよ、こんな国！」

ひっ、ひっ、と引きつった笑い方をしながら、そう言う。

シーレは、兄の手をもう一度しっかりと握って、頬を添えた。

「それでも、愛しているわ。……イニエスタ」

名残惜しさに引きずられないように、彼女は後ずさりして手を離れた。

とん、と父の胸に背中がぶつかると、震える手が彼女の肩を支えた。

イーネはじわじわと自由を取り戻していた。

指を一本ずつ動かして、その動作を確かめる。

ぎゅっと拳を作り、再び腕を振り上げたその時、イーネの耳が男の声を拾った。

「開け、獄の門。約定を違えし者をその鎖で縛れ！」

スーツの袖に包まれた引き締まった腕が横薙ぎに振るわれる。

イーネが現れた時のように闇が凝り、そこから黒い門扉が立ち上がった。

軋んだ音を響かせて開かれた扉の奥には妙に澄んだ闇があった。そこから数知れない鎖が伸びた。

目を見張っていたイーネは反応が遅れた。

鎖は彼を、彼だけを捕え、漆黒の扉に向かって引きずった。

「貴様、アルイプス公爵か！」

喉の奥を引き裂く様な声が大聖堂に訝する。

「人の世に渡る悪魔を監視し、捕縛する、異端の悪魔！」

「お前は闇に堕ちた」

こつり、と一歩、エイドフェルトは前に出る。

「己の瘴気を抑えれば、その狂気を休めれば、人として生きること  
も叶っただろうに。お前はそれを望まなかった」

「誰がそんな面白くも無く生きてゆける?! 僕の生は僕の物で、  
そして、僕は悪魔だ! 闇を求め、争乱を求め、血を求めて、一体  
何が悪いと言うんだ!」

シーレの肩に乗せていた手を片方外して、王は目元を覆った。

王は息子のこの性を知っていた。だからこそ、塔から出す訳には  
いかなかったし、娘と会わせる訳にはいかなかったのだ。

興奮して喚き散らすイーネに、エイドフェルトは冷然とした言葉  
を突きつける。

「お前の理由など私の知った事では無い。ただ、お前は秩序を乱す  
者だから、私は私の“使命”を全うするのみだ」

そして、最後通牒を下す。

「閉じる」

瞬く間にイーネは扉の奥の闇に引きずり込まれ、そして黒い門扉  
は閉じられた。

錠の下りる音の後、扉は床に広がる闇へと吸い込まれるようにし



て消えた。

「……シーレ」

扉の行く先を見守っていた彼女は、エイドフェルトの呼び掛けに顔を上げた。

「間もなく時間が動き出す。それまでに、取り繕うんだ」

彼はそれだけ告げて、背中を見せた。

「ええ……」

シーレはそう呟いて、父に向き直った。

すっかり憔悴した彼の手に、再び王冠を持たせる。

「お父様。罪無き兄を断罪したわたくしを、王にと望んで頂けるのでしたら、どうか続きを……」

床に膝を着き、少し俯いた娘に、王は向き合った。

\*

この日、戴冠式を終えたシルエスタ女王は、“宵月の都”を首都とすることを宣言した。



## 聖夜

夜、シーレはベッドの上に膝を抱えて座っていた。

目の前にある大きな窓は開け放たれ、冷たい風がカーテンを揺らしている。その風からは、雪が降る前の香りがした。

彼女に確信は無かった。

けれど、予感があった。

そうして、窓の向こうに一つ影が落ちた。

「……どうぞ」

向こうが声を掛けて来る前に、シーレは入室の許可を出した。

彼女がベッドから足を下ろすのと同時に、エイドフェルトが室内に入って来た。

「寒いだろう……」

不思議そうに言って、彼は窓を閉める。

シーレはその人間臭い言い方に、小さく笑った。

「貴方が思う程では無いわ」

ベッドの足側に備えられた暖炉が煌々とした炎を保っている為、

シヨールさえ羽織っていればそれほど寒さを感じないのだ。

エイドフェルトは毛足の長い絨毯の上を歩いて、シーレのすぐ傍まで来た。

彼を見上げるシーレは、穏やかな口調で言った。

「……お兄様は？」

瞬いてから、エイドフェルトは口を開く。

「大人しいものだ。ただ、静かに過ごしていると報告があった」

「そう」

少し瞳を伏せたシーレの前に、彼は片膝をついた。

神妙な顔で彼女を見上げて来た。

「すまなかった」

シーレは呆気にとられた。まさか謝罪されるとは思ってもいなかったのだから。

「どうして……？」

尋ねると、エイドフェルトは小首を傾げた。

彼の表情には戸惑いが浮かんでいる。

「私は、自分の“使命”を全うしたと思っている。けれど、貴女には謝りたかったんだ」

「わたくしには？」

その問いへの頷きは小さい。

「そう。……貴女から、大きな、重要な存在を奪い取ってしまったと感じたから」

その言葉に、シーレの瞳は揺れる。

「ええ。……まるで、半身がもぎ取られたみたいだわ」

「……………」

胸を押さえて苦しげにするシーレに、エイドフェルトは掛ける言葉を見つけれなかった。

強く握られて手の平に爪を食い込ませるその手を開かせるくらいしか出来なかった。

細く冷たいその手を、エイドフェルトの大きな手が包み込む。

その温もりに、シーレは内心で『悪魔なのに暖かい手を持っているなんて』と苦笑する。

自分よりずっと大きな手を見つめながら、彼女はずっと考えていた事を口にした。

「王たるわたくしに選択肢は少ないわ」

エイドフェルトの青灰色の瞳がふっと上がって、彼女を見つめる。

「貴方がいなかったら、わたくしは恐らくお兄様を殺していたでしょう……」

びっくり、と握った手が震える。

シーレには自分の手がそうした感じだし、エイドフェルトには自分の手の反応だと感じられた。

「ですから、……有り難う。エイドフェルト」

顔を上げたシーレの緑の瞳にうつすらと涙が浮かぶ。

「わたくしに、もう一つの選択肢をくれて、有り難う……」

引き寄せられるように、エイドフェルトの唇はシーレの目元に添えられた。

そつと、シーレは瞳を閉じる。

暖かな感触が涙を吸い取る。

それから、空を舞う粉雪のように優しいキスが彼女の額に、瞼に、頬におとされた。

唇が離れた気配を感じて、シーレは瞳を開く。

屈み込んで彼女を覗き込むエイドフェルトがそこにいた。

「何故、“宵月の都”を選んだんだ？」

兄との最初で最後の邂逅は、悪魔であるエイドフェルトから見ても、彼女を傷つけるものでしか無いだろう。

しかし、シーレはうつすらと微笑みを浮かべた。自分の手を包み込む固い手を握り返す。

「忘れてく無かったの、お兄様を。……あの塔は決して無くさない。この街は、わたくしの政の要となり、わたくしの罪を問いつける場所にするのよ」

潔いその言葉に、エイドフェルトは苦笑う。

「自分に敵しすぎるのも、どうかと思うけど……」

その言葉に、シーレは少し考え込んだ。

ふと、ある案を思いついてしまった。

いや、きつと自分はこうする口実を、戴冠式の時からずっと探していた気さえする。

「ねえ。謝罪をしたということは、わたくしに償いをしたいと思っていると考えると良いのかしら？」

シーレの唐突な言葉に、一瞬、エイドフェルトの目が見開かれる。

けれど瞬き一つで、真摯な態度に戻った。

「ああ」

その迷い無き返答に、シーレは前に踏み出す背を押ししてもらった気がした。

だから、胸の内から零れ出す想いを口にする。

「では、……今夜はずっと傍にいて」

エイドフェルトの瞳が再び見開かれる。

シーレは彼の手の手の中から自分の両手を抜いて、震える指先を、彼の肩に乗せた。

「一人で過ごすのは……………」

淋しすぎるから、という台詞は吐息と共に宙に溶けた。

一拍を置いて、シーレの指先からエイドフェルトの肩が擦り抜ける。

彼女の手の平から腕の内側へと、順々に上質の布が下っていく。

静かに触れた唇はどこか熱い。

「永の時を求められはしないと知っている。ただ、今は、この夢を共に……………」



囁きがシーレの顎先を撫でる。

「夢……?」

彼女の問いに、エイドフェルトは優しく笑う。

右手がベッド脇の天蓋のタッセルを解き、左手はシーレの艶めく金色の髪を梳く。

「黄金の夢を見ているようだから」

エイドフェルトの背中まで垂れた天蓋の作る影の中でそう言われ  
ても、シーレは不服しか感じない。

「わたくしは此処にいて、エイドフェルトも此処にいる。それは永  
遠にも勝る事実だわ!」

「……………困ったな。貴女はどんな時でも私の心を捕えてしまう」

啞然とした後そう言ったエイドフェルトに、シーレは不敵な笑み  
を浮かべた。

「それこそ、わたくしは永の時、貴方のこの心を捕えて離さないと  
約束して差し上げるわ」

「また、“契約”では無くて“約束”か……………」

楽しくて楽しくて、エイドフェルトは低めた声で笑う。

彼の首に腕を回して、シーレは告げる。

「そうよ。真名が欲しければあげるわ。でも、わたくしは王で、貴方に恋する人間。心までは縛れない」

「真名なんて必要じゃない」

ただ、君の心を……。

ゆっくりと天蓋が広がって、ゆらりと揺れた。

## エピソード

宵月の都を首都として、三十年近く国を統治したシルエスタ女王は、その美しい金の髪と輝かしい功績から“金色の女王”と呼ばれた。

生涯夫を迎える事は無かったが、三人の子どもを産み、慈しんで育てた。

結婚をしなかったのは、夫やその実家が権力持って政治的な均衡を崩す事を恐れた為と言われている。

しかし一方で、『女王陛下の夫は悪魔だから、夫として公表出来ないのだ』という悪意の無い噂が国民の間では長く囁かれたという。

近代の学者たちは、その噂は彼の女王の美しさと神秘性を後世に伝える為の創作であろうと説明付ける。

## おまけ（前書き）

『聖夜のバルド』という作品の登場人物たちの小話になります。  
未読の方も楽しめるように書いたつもりです。

もし興味がわきましたら、そちらもどうぞ……。

## おまけ

「ええ！ “金色の女王”の夫って本当に悪魔だったの！？」

暖炉の炎で暖められた部屋で、亜麻色の髪にきらきらした碧眼を持つ少年セナが叫んだ。思わず一人掛けのソファから立ち上がって、無意味に腕を振っている。

それに答えるのは、三人掛けのソファに腰掛けた銀髪の青年バルドフェルトだ。優雅にティーカップを傾げる様は優雅で洗練されている。

「ああ。現在のアルイプス公爵エイドフェルト殿だ」

思いがけず聖域に入り込んでしまった為とその後のいざこざですっかり魔力を消費してしまったバルドフェルトだったが、小一時間ならば人型をとれるくらいには回復を遂げていた。

それもこれも、恩人の少女ルカとその弟セナと共に、彼らの祖母の家に非難したお陰だろう。なにしろ姉弟の実家の隣は教会で、そこにいるだけで魔力が奪われてしまっていたのだ。

羊の角を持つ黒犬のような獣型の時はルカの膝に乗っていることが多いバルドフェルトも、流石に人型をとっている今は彼女の隣に座っていた。

一方、亜麻色の髪に緑の瞳の少女ルカは両手で持ったミルクティーを飲みながら、のほほんと二人の会話を聞いていた。

「うっわあ、うっわあ！ 凄いや！ まさかあの伝説が本当だったなんて。えっ、ってことは、何？ 王家の血筋の人って悪魔の血を引いてるのかあ。ど、どどど、どこで会えるかなあ。今度サインとか貰っちゃっていいかなあ！」

大興奮するセナに対し、バルドフェルトは「阿呆らしい……」と冷めた視線を送り、姉であるルカはいつもの事だと傍観するのみだ。

熱狂的なオカルトファンを自称するセナにとって、同じ国内に悪魔の末裔がいるという事は重大な事実のようだ。

「あれ？ でも、逆を返せば、バルドも人間の血を引いてるってこと？」

そこで、はっとその考えに思い至ったセナは、そのまま口に出して聞いた。

一方、テーブルの上にティーカップを戻したバルドフェルトは眉間に小さな皺を作った。

「うん？ アルイプス公爵位は血縁による世襲制では無いから、私は純粹な悪魔だぞ」

「え。 そうなの？」

何故か胸の前で握り拳を作ったセナは、きよとんと瞬いた。

「そうだ。 素養と才能を持つ者を後継者として選び、現アルイプス公爵が育てるのだ。……人間に対する嗜虐性を発揮する者があの“使命”を全う出来る筈が無いだろう」

「確かに！。アルイプス公爵って、悪魔の中じゃ、そうつつつとう異端だよー」

思いつき力を込めた少年の台詞に、分かってはいても、バルドフェルトは苛ついた。

「悪かったな、異端で。そうでないと務まらない！」

「あ、ごめーん。悪気は無いんだよ、怒らないで。ねっねっ」

両手を摺り合わせて、セナはバルドフェルトに低姿勢で謝った。

それからころつと態度を改めると、再び一人掛けのソファに座り直した。

「うーん。それにしても、アルイプス公爵の子育てって、英才教育なんだろうね。バルドって凄い上品だもんね」

なんて言いながら、彼はソファの上にあぐらをかく。

「子育て……。まあ、幼い頃から同じ館に住んでいたから、そう言えないことも無いか……」

「へえー。へえー。同じ館で、つきつきり。へえー。じゃあ、“金色の女王”の話とかもいつぱい聞けた？」

身を乗り出して聞いて来るセナに、嫌な事を思い出したバルドフェルトは顔を歪めて答えた。

「あの方は女の話になると無理矢理に自分の妻の話に持って行くの

だ。聞きたく無くても聞かされた」

彼はうんざりしてばかりだった当時を思い出して頂垂れた。

その隣からおっとりとルカが言った。

「ふうん……………」

本当に何気なく、平静そのものの声音だ。

けれど、その奥に宿った感情にバルドフェルトは敏感に勘づいた。

細いルカの指は、持っていたティーカップをゆらゆら揺らす。

「ねえ、セナ。お茶が無くなっちゃったわ、ね」

にっこりと、少女らしい微笑みを浮かべてそう言う。

いつもは全く空気を読まないセナも、姉が放つ珍しい不機嫌の気配に気が付いた。

これは不味いと、慌てて席を立つ。

「そ、そうだねっ。今度はコーヒーでも淹れて来るよ！」

そそくさとお盆に三人分のティーカップを乗せてその場を去る。

コーヒーは豆を挽くから時間が掛かるし、ティーカップを洗う時間を加えればかなりの時間稼ぎになると判断したのだ。



セナの去り行く背中に声を掛ける事も出来ず、バルドフェルトはルカの様子を横目で窺った。

すると、彼女はちょこんと彼のすぐ傍に座り直した。

「バルドも、女の人の話とかするんだ」

彼の方を見ないで、そう聞いて来る。

内心、汗をだらだらとかきながら、バルドフェルトは何とか釈明を口にする。

「言っておくが、獄中の女悪魔の話とかばかりだ。女悪魔の特徴とか、特殊な性質を持った女悪魔とかだな……」

言いながら、ふと、何故自分はこんなに必死になっているのかと不思議に思うが、口は勝手に動いていた。

「うん。うん。“女”悪魔のお話なんだよね」

そこで、ルカは彼を見上げてにっこりと笑った。

「どうやら地雷を踏んだようだ。」

「別に女悪魔ばかりでは無い。他の、その、変わった悪魔の話とかに混じってするのだ。そうすると、エイドフェルト殿は無理矢理シルエスタ女王の話にすり替えてしまつて、むしろ私は迷惑をしていたっ」

そう。バルドフェルトはアルイプス公爵として必要な知識が欲し

かったのであって、決してエイドフェルト夫妻の惚気話が聞きたかった訳では無いのだ。

しかし現アルイプス公爵はおっとりとした性格ながら、かなり強引なところがある。

ふとある時、女悪魔が怒ると思っても掛けない行動に出る事があるという話になった時だ。

バルドフェルトとしては、その場合の対処方法を聞きかかったというのに、彼は『そう言えばねえ……』と優しげな眼差しを浮かべたのだ。

『シーレはね、怒ってても可愛いんだよー』

唐突な話の転換に戸惑ったバルドフェルトが、『いえ、対処方法を……』とそれを遮ろうとすると、すかさず続きを話し出した。

『もう、ねえ。ぶんぶん怒って口を聞いてくれない時にキスするとさ、びっくりして目を真ん丸にするんだよ。たまんなく無い？』

『いえ、それよりも先の話……』

『まあ先達の話は聞きなつて。いいかい。不意打ちってというのは相当親しくならないとしちゃ駄目だよ、バルド』

『そんな知識は私には不要です』

本気で彼がそう答えると、エイドフェルトは可笑しそうに首を傾げた。

『ううん。どうか？ アルイプス公爵っていうのは、結局のところ、最も人間に近い悪魔なんだと、私なんかは思うけどね』

『人間に近い……？』

悪魔に、人間に遠いも近いも無いだろう、とバルドフェルトは思った。

『悪魔は悪魔でしょう。人間とは別の生き物です』

そう断言すると、エイドフェルトは肘掛けに立てた腕にこめかみを乗せて、瞳を細めた。

幾度も人間を見つめて来た今のバルドフェルトならば、あの視線が“慈愛”や“親愛”に近いものとわかる。

『シルエスタには、人間と悪魔の違いは瘴気の有無だと説明したけどね。彼女と生きるうちに私の考えは変わっていったよ』

『悪魔と人間は同じようなものだとも？』

ははっ、と軽やかな笑い声が響いた。

『いや。根本は全く別の生き物さ。でも、人間に様々な人格があるように、悪魔にも様々な種族や性質があるものだろう』

悪魔の種族は星の数程あるし、同族だって同じ性質とは限らない。だからバルドフェルトが次代のアルイプス公爵に選ばれる余地があったのだ。

『そんな事を考えていると、私たちの間の境界線がどんどん曖昧になっていったね』

顔を上げて、エイドフェルトは悠然と微笑んだ。

『つまりは、こうだ。私のここは、何時いかなる時もシルエスタに囚われているという事だよ、バルド』

胸の中心を拳で軽く叩きながら、その笑みは誇らしげでさえあった。

自由気ままで囚われる事を嫌う悪魔の言葉では無いが、ルカという存在を得たバルドフェルトには、彼のその台詞は妙に胸に響いた。

そして最愛の少女は、束の間物思いに耽っていた彼の腕に自分の両腕を巻き付けた。

「ねえ、バルド。……名前を呼んで？」

「……ルウ」

フォーチュンクッキーに外れが入っているくらい低い確率で現れた不機嫌な彼女は、勿論愛称で呼ばれたかった訳では無い。

ますます笑顔を深めたルカは、死刑宣告に少し近いものをバルドフェルトに告げた。

「ちゃんと、呼んで？」

聖人から戴いた名前である為、彼女の“ルカ”という正式名称は、口にするだけでバルドフェルトから魔力を奪う。つまり、彼は少し戻って来た魔力を一気に失って、獣型になってしまふのだ。

当然ルカはそれを知っている。

彼女の（セナ曰く）“癒しパワー”が無いとバルドフェルトはまた暫く人型に戻れなくなってしまう。

だから、これは彼女なりの制裁処置なのだ。八つ当たり、とも言うかも知れない。

暫くの間、至近距離で見つめ合い続けても、ルカはちっとも折れる気配が無い。

バルドフェルトは天を仰いで息を吐き出した。

さつとルカに向き直ると、その唇に柔らかなキスを落とした。

顔を離すと、目を丸くして、じわじわ頬を赤らめるルカが見える。

その様子に満足して、彼は囁いた。

「ルカ……」

すぐにぽんつと小さな音がして、ぽてん、と黒い小さな獣がルカの膝元に落ちて来た。

頭に羊の様な角を持つ、バルドフェルトの獣型の姿だ。

ルカは彼をきちんと膝に乗せて、その背を撫でてやった。

温和な性格の彼女は怒り続けるのが難しいし、なにより獣型のバルドフェルトは大変可愛い。

八つ当たりは終わったのだから、後は愛でるのみだ。

暖かい膝の上で、前足に頭を乗せて寛いだバルドフェルトは心の内でそつと呟いた。

貴方の心が分かりかけていますよ、エイドフェルト殿……。

## おまけ（後書き）

クリスマス企画の『金夢のエイド』はこれにて完結となります。  
最後までお読み頂き、有り難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6881z/>

---

金夢のエイド

2011年12月31日00時45分発行